

幼児の描画発達縦断的検討 (M児 3歳から5歳)

—象徴期から写実の黎明期への移行を幼稚園時の描画の
縦断的データから考察する。—

西川 晶子

要約

幼児の描画発達については2歳くらいの幼児の感覚運動的な腕の動きの軌跡としての線描があらわれるなぐり書きの時期（スクリブル、錯画期）、次に渦巻や円があらわれ、幼児が命名し始める象徴期（命名期→図式期前期）へと移行する。顔から直接手足が出る頭足人が出現する時期を経て図式的に人形、太陽、木などを描く図式期から対象物を見えたように描く写実の黎明期へと移行することが東山ら（1999）によって報告されている。本稿では一人の幼児の3歳から5歳の描画を縦断的に検討することによって東山ら（1999）による描画発達の再認と、描画発達の各段階の移行がどのようにおこなわれるかの検討を試みた。東山らの描画発達のおおよその年齢よりは早く発達が起こっており、各段階の移行期には、またがる両段階の特徴を備えた描画が観察された。各段階への移行は先行する段階の特徴が少しずつあらわれたのちに移行が起こることが確認された。また4歳0か月前後の短い時期の描画に空想の友達（イマジナリーフレンド）と考えられるファンタジックな存在が頻繁に観察された。

キーワード：幼児の描画発達 なぐり書き 象徴期 図式期 発達段階
空想の友達（イマジナリーフレンド）

はじめに

幼い子が手の動きのままに紙の上に軌跡を描いては楽しみ、線遊びとして何度も繰り返される。その後ただの線遊びの軌跡だった線に注釈が加えられ、子どもはつぶやきながら線を描きはじめる。線はいつのまにか円として閉じられ、「これはなに？」と問うと「ママ」「Mちゃん」などと答えるようになる。

この過程は多くの子育て中の親が遭遇する場面だと思うが、その心理的過程においては運動感覚的行動からふと象徴が始まって描かれた円が子どもにとっての身近な誰かを表現するようになっていく劇的な心的転換点である。

さらにぐるぐると描かれた丸が「ママ」であった段階から手足が頭から現れ、(頭足人) やがて、その子どもの健やかな成長をなぞるように、胴体や四肢がのびやかに立ち現れていき、発達というもののドラマティックな展開を見ることができるといえる。

幼児の描画は自由な心の発現として常に大人の心をつかんで離さない魅力に満ちた存在であるといえるだろう。東山ら(1999)は子どもの絵の魅力について、古代部族が岩肌などに刻んだ壁画との共通性があるとして、また子どもの絵の発達、個体発生が系統発生をなぞるように、人類の描画発達をなぞるものとして非常に重要な研究対象だと述べている。さらに20世紀の代表的な画家たちが無邪気な子どもの絵に憧れた理由として、子どもの描画のなかに絵という表現の根源的なフォルムや生命の根源的な原形があるかもしれないと述べている。

従来の子どもの絵の研究においては複数の子どもの絵を年齢別のサンプルとして、量的塊として分析を加えたものが多数であったが、本稿では一人の幼児の描画を時系列的に分析することで、個人内において、子どもの描画発達の各段階の移行がどのように行われるかを詳細に検討しようとするものである。子どもの描画の発達の理論として本稿では東山ら(1999)による『子どもの絵の発達段階』とリュケ(1979)を参照しながら、象徴期、図式期、写実の黎明期という描画発達が個人内部でどのようなタイミングで起きるのかについて

考察をおこなった。

子どもの絵の発達をどう考えるか

子どもの絵はそれぞれが独特の表現を持っているが、共通の発達の道筋があり、どの子どもも多少のちがいはあるが基本的には同じ発達の道筋をたどる。いいかえれば子ども自らが生まれながらにして内在しているプログラムにそって生得的、普遍的な発達をする。そしてその発達の道筋はいくつかの段階とその特徴がある。東山ら（1999）

幼児の描画発達に関して東山ら（1999）ではローエンフェルド（1903-1959）やサイリル・バードの学説を参考に以下のように作成された。

子どもの絵の発達段階

- (1) なぐり書きの時期（錯画期・スクリブル）（1歳から2歳半ごろ）
 - a はじめは、点や短い線をたたくようにかく。
 - b 手首だけでなく、ひじも使うようになり、線はなめらかになる。
 - c 線に意味をもたせて、つぶやきながらかく。
- (2) 象徴期（命名期→図式前期）（2歳半から4歳ごろ）
 - a 丸や渦巻きが現れ、それに意味づけをする。
 - b 形を網羅的・断片的に連想するがままにかく。
 - c 象徴的な形から頭足人のような人や車や家が現われる。
 - d 色は好みにまかせてぬるが、4歳ぐらいから対象物と一致しはじめる。
- (3) 図式期（5歳から8歳ごろ）
 - a 人形・太陽・花・木・家を記号（図式）的にかき、しだいに動作表情が表れ、形も複雑化していく。
 - b 基底線、空が表れ、画面上に空間の設定ができる。
 - c レントゲン描法、展開描法、多視点描法、割合の欠如、拡大描写、擬人化など幼児独特の表現方法で絵をかく。
 - d 男児は強いもの、はやいもの、メカニックなものなど闘争的な題材、

女兒は家、花、小鳥など平和的な題材の絵をかく傾向がある。

(4) 写実の黎明期（8歳から11歳ごろ）

- a 羅列的な表現から、重なり、奥行き、遠近などの空間表現がではじめる。
- b 図式的な表現傾向から写実的表現傾向へ向かう。
- c 部分的には写実的にかけるが全体的には矛盾が起きたり、バランスが狂う。

(5) 写実的（11歳から14歳ごろ）

- a 観察力が増し、客観的であるがままの表現ができる。
- b 明暗、陰影、立体感、空間、質感、量感などを表せる。
- c 予想をたて、計画的に作業ができ、批判力、評価、鑑賞する力が育つ。

(6) 完成期（14歳から18歳ごろ）

- a 客観的な描写力が高まり、技術的にも精巧。
- b 本来の芸術に目ざめ、外形の美だけでなく、内面的な心情や思想的な美も理解できる。
- c 抽象性、思想性、社会性など深まりのある思考、表現ができる。

絵の表現の発達の5つの基本

- ① 子どもの絵の表現は一般的な心身の発達と深い関係がある。（認知、運動感性や感情）さらに重要な点として生活体験の充実や世界観の拡大が絵の発達や内容を深めるうえで大きく影響をあたえる。
- ② 子どもの絵の表現の発達は基本的には規則的で同じ発達の道筋をたどる。生活様式によって多少のちがいはあるが幼児期では子どもの絵は万国共通の発達過程を示す。
- ③ 子どもの絵の表現の発達には順序性があるが、指導のあり方や個々の子どもによって個人差があるので年齢とは一致しない面があり、流動的に考える。特に発達はゆっくりな子は年齢相応の発達の子どもと比較して大きな遅れがある場合があり、「絵が下手」などという評価が子どもの心を傷つけて

しまうことがあるが、周囲の大人は見守りながら生活体験を充実させることが重要である。

- ④ 子どもの絵の表現の発達の道筋は、世界中どの子どもも少なくとも幼児の段階では同じ発達の道筋をたどる。
- ⑤ 子どもの生活環境や文化環境、指導のあり方、興味関心によっても表現の発達が多少異なる。

東山ら（1999）『子どもの絵は何を語るか』より引用。

リュケ G . H . (1927) による幼児の描画発達

リュケ（1927）は、幼児は目の前の対象物を実際に見える像ではなく、幼児が自身の持つ対象について知っている要素を絵に描こうとするとして「知的リアリズム」と名付けている。その後7、8歳以降、見え通りに描こうとする「視覚的リアリズム」と移行するとしており、の図式期（5歳から8歳ごろ）から写実の黎明期への移行とおおよその発達時期が重なる。

なぐり書き期から象徴期への変化

描画における初期段階は1歳から2歳のなぐり書きで、当初は対象の再現ではなく、紙にあらわれる腕の運動が紙に残す軌跡であるが、2歳児は曲がった線や円形などの絵の部分について命名を行うようになるという。東山ら（1999）はこの変化について「自分のイメージしたことを、画面に再現しようとしている。この行為は芸術活動の根本的な行為の、まさに黎明なのである。」とその変化の重要性を強調している。

リュケ（1927）はこの発達段階を「偶然のリアリズム」と呼び、線の中にとときどき実在の何かと似たものが生み出されることにより子どもはその線に解釈を与えるようになり、自分の描くものが何かを表しうると気づいた子どもたちが意図的に描画を行うという。この時期の変化について、従来の研究では表象描画の出現を子どもの個人内部のものとして発達的な変化としてのみ説明し

ていたが、近年の研究ではこの時期の描画が養育者との相互のやりとりを介して行われることに注目し、養育者の問いかけや意味づけが補助的に描画の意味づけを学習させる役割を果たしていることが明らかになってきている。山田 (2014)

象徴期から図式期への変化

象徴期においては子どもは円や線、四角形などを組み合わせながら言葉の説明を介しながら象徴的に表現しようとするので、対象物と描かれた表現は独立の関係であることが多い。その後図式期（5歳から8歳ころ）がおとずれる。自分の頭の中のイメージが浮かぶままに羅列的に描いていた象徴期から、絵の中に地面をあらわす基底線を描いたり、絵に全体としての秩序がうまれてくるという。空間的秩序が形成され、より複雑な絵記号を使うようになる。レントゲン技法（重なっているものが透明になって透けているように描く）や多視点の絵が描かれる頃である。東山ら (1999)

図式期から写実の黎明期への変化

基底線上に並べる表現から次第に見えたように描く写実的表現への移行期であり、自分の興味ある対象を誇張して描いたり、ダイナミックに描き、矛盾をはらみながら物と物との重なりや遠近感を表現しようとする。リュケ (1979) はこの変化について子どもの注意力、批判能力、技術の獲得から説明していたが、その後多くの研究から対象の呈示方法や教示内容によって8才未満の子どもであっても、見え通りに描くことが可能であることが示されている。子どもの認知発達の観点からこの変化は空間認知の発達、ルールや技能の習得、描画におけるプランニング能力の発達などの様々な要因の関与が説明されてきている。山田 (2014)

方法

M児の幼稚園時代の自由画帳と作品集から抜粋。幼稚園教諭とのやりとりの記録が記入されており、M児による説明として分析に利用することとした。月齢は日付スタンプによる作画月日から算出した。また分析途中で見いだされた描画中の人物画のボディイメージの発達と空想の友達（イマジナリーフレンド）についても検討をおこなう。

分析

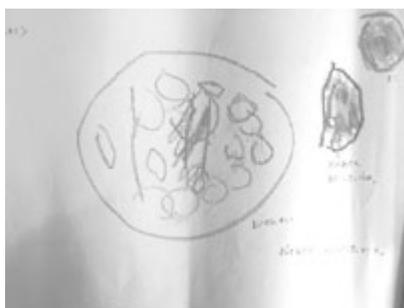


図1 3歳6か月

〈たのしがったえんぞく〉（画面左から注釈以下同様）おさるさんみにつた おかあさんあきこっていうの まいせんせい

丸で動物園のサル山、サルたち、おかあさん、せんせいを意味付けている象徴期の特徴をしめしている。

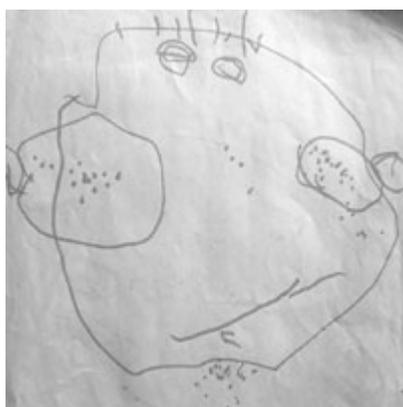


図2 3歳ころ（推定）

画面いっぱいに丸で構成された父と思われる顔、ひげと思われる点を打つ腕の躍動が感じられる、点が輪郭線の外まで描かれ、幼児の腕の感覚運動がよくあらわされている。



図3 3歳7か月

〈いつもありがとう〉うちのおとうさんだつてめがねかけてんだよー！！もとじていうのもとじー。きのうおとうさんけっこんしきいったんだよ。ともだちの。

対象児へのインタビューによるとご飯をたべているお父さんの絵を描いた記憶があるという。拡大されたごはん粒？の大きさ、メガネとおもわれる丸、象徴期らしい作品。



図4 3歳10か月

おがあさん ごはんつくるのまめごはん！！

いままでの画面いっぱいの顔から小さな胴体と手足が表れているいわゆる頭足人の登場である。口角が上にあがり、表情がでてきた。目にまつ毛が添えられた。図式期の要素が出てきた。画用紙周囲に描かれた線によってそれまでの羅列的な表現から画用紙内での空間秩序の萌芽を感じ取ることができる。



図5 3歳10か月

おうたうたつてんの このこメリーちゃん ともがちゃん

胴体部分の発達が見られるがこの後しばらく鳥の胴体のような片流れの

胴体が頻出する。またイマジナリーフレンドとも思われるような、M児の周囲には実在しない名前的人物があらわれる。実在する友達の名前が頻出し、横の人間関係への意識が高くなっていくことが伺える。スカートらしい胴体、まつ毛、女兒らしい表現がでてきた。腕脚が線描から幅のある描かれ方をしている。



図6 3歳10か月

なんがへびみたいひと。これこっこちゃん、あのねばんをやくひと。これはみつばちせいや あのねあめがふってるからかささしてるの みつきちゃん はな

画面最左の人物の表情が顕著である。イメージの産出と命名がされている。手に傘を持っている様子。胴体は片流れ。靴か足のような表現がみられる。まつ毛や指とおもわれる描写。複数の花を持っている。人物が横並びになり上部に雲のような形。空間秩序が徐々にあらわれてきた。



図7 3歳10か月

おうたをうたってるの。ティミーちゃんメーリンちゃん

図式期の特徴である太陽と帯状の空が上部にあらわれた。このころ頻出するイマジナリーフレンド（メで始まるキャラクター様の名前が多い）（➡）胴体は片流れで鳥のような姿。



図8 3歳11か月

〈たのしがったなつやすみ〉これはまこのともだち、なんちゃんっていうんだよ！これはまこのおとうと あそんでるの。これからブールにいくの。

頭足人。実際は存在しない「おとうと」と説明している。



図9 3歳11か月
〈うんとこしょどっこいしょ!〉
まこのはおっきいのがとれたの。おい
も かのんちゃん ゆうがちゃん と
もくん おひさま

芋ほりについて描いた。太陽と地面の基底線が描かれた。レントゲン描法と見られる地中のサツマイモ。いままでにないこととして足がしっかり描かれて、ボディイメージの発達がかがえる。真ん中の子どもが左側に持った物を差し出すような横向きの動作が表れた。



図10 3歳11か月ころ

この時期頻出するファンタジックなキャラクター、ウサギの頭部だが耳部分に目があり、円形の腕、片流れの胴体。足部分は拡大され指? 足ひれ? が描きこまれた。(➡)

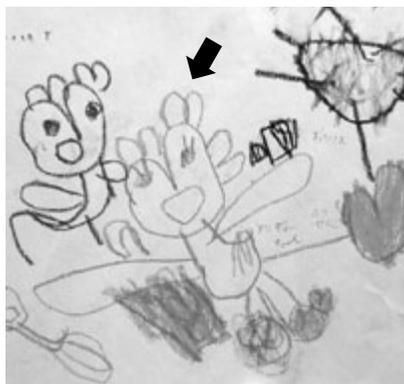


図11 3歳11か月
メロディーちゃん ふうせん おひさま
 図11と共通するキャラクターが2体描かれた。腕は翼のようで、脚部分が線ではなく太さがあり1体の足部分は彩色された。



図12 3歳11か月
バナナ食べてるところ。おとうさん
バナナ メリービー

右側の父にバナナを差し出す動作を体幹の向きなどでしめそうとする。父は頭足人で描かれている。バナナを持った手は指まで描かれ、二人を囲んだ円によって注意が集中している。片流れの胴体。



図 13 4歳0か月
おはなとつてるところ！おはな せん！！でんしゃのせん！あしあと
メリーコーラちゃん

基底線を思わせる電車の線（線路？）メリーコーラちゃんはじめてこのようなキャラクターに左右対称のスカート様の胴体があらわれた。



図 14 4歳3か月
みんなてバレエにいらるところ。

おひさま はるがちゃん ゆうがちゃん おぞら まいせんせい

女兒らしいリボン、バッグ、ドレスが図式的に描かれているが、バッグにハンドルに腕が通されている様子を描こうとするなど（⇒）紙人形のようなではあるが重なりが描かれはじめている。写実の黎明期への芽生えが観察できる。



図 15 4歳6か月
〈たのしがったえんぞく〉ぞうさん
おばあちゃん まこ ぞうさんみ
るところ、おしりね、あのねしっぽ
つてもながかったー

図式的な太陽、空、花などが見えるが、象は見たものを描こうと試行錯誤した様子がうかがわれる。人物も指、足が描かれ、首はまだだが、胴が写実的に描かれ始めている。写実の黎明期への一歩といえる。



図 16 4歳11か月
〈ちがらをあわせて〉
ますみせんせいがうんどうがいのし
ゃしんとつてるの なほみちゃん
ももがちゃん

体操着の色、帽子、人物の動作、姿勢とより写実的に描いた。帯空、基底線などは図式的か。



図 17 5歳0か月
〈かっこよかつたしょうぼうしさん〉
みんながようぶくみてるどころ しょう
ぼうのひと しょうぼうのひと
しょうぼうしょのひと

空、太陽は図式的ではあるが、消防士の洋服に注目しながら細かい細部のボ

ケットなどを描きこんでいる。足もとのブーツ上部の線なども個別に観察して描いている。印象深かったことが想像されるブーツが拡大されて描かれており、図式的といえる。指の爪なども描こうとしている。自分に見えたものを描こうとする視覚的リアリズムの萌芽が確認される作品。



図 18 5歳1か月
〈ドキドキしたおゆうぎがい〉
みんなて楽しいマーチをやっている
ところ

舞台上で2列に並んでいるところを描こうとしている。上段の子どもには下半身がえがかれておらず、下段の子どもの重なりが意識されており、観客としてみた場合に見えが意識された視覚的リアリズムの要素が含まれた作品である。帯空などは図式期の特徴を有しており、鈴、カスタネット、など興味のあるものを丁寧に描いている。

描画時 月齢	象徴期				図式期							写実の 黎明期	
	存在 の丸	画面 いっ ぱいの 顔	スク リブル	頭足 人	表情	女性 的表 現	基底 線	帯空	レン トゲ ン描 法	割合 の欠 如	太陽	写実 的表 現	重な り
3歳 6か月 以前	○	○	○										
3歳 7か月			○										
3歳 10か月				○	○	○		○			○		
3歳 11か月				○	○	○		○					
4歳 0か月					○	○	○						
4歳 3か月						○		○			○	○	○
4歳 6か月					○						○		
4歳 11か月					○		○	○			○	○	
5歳 0か月					○		○	○		○	○	○	
5歳 1か月					○	○		○				○	○

表1 M児描画発達の特徴を示す部分の出現推移 筆者作成

考察

1. 各発達段階間の移行

東山ら（1999）は子どもの絵の表現の発達には順序性はあるが発達の速度は個々の個人差に左右されるとあるが、本児については全般的な発達の早さが指摘できる。

まず象徴期から図式期への移行が3歳10か月ころから始まったことがわかる。頭足人でありながらまつ毛のある人物像が描かれ、（女性的な表現）その後人物像の胴体以下が充実していく。3歳10か月ころから帯空などの図式期の特徴があらわれ、象徴期の特徴が消えて本格的な図式期にはいるのが4歳0か月ころと推定される。

レントゲン描法は3歳11か月に現れるという早さで観察された。その後帯空という図式期の特徴を継続しながら、体育帽子や消防士の服装の詳細、バッグのハンドルを通る腕など写実的な表現が散見しながらも、5歳1か月までの描画では全体的に図式期の特徴の多い作品となっている。

各時期間の移行は両期間の特徴を合わせもつ描画の時期（表1網掛け部分）が認められる。近藤ら（2016）は幼児に対する描画実験を行い、年長児の描画に知的リアリズム期と視覚的リアリズム期の特徴が混在しているとしているが、M児においても5歳1か月（年中クラス）時点の描画では全体として知的リアリズムの特徴を示しながらも舞台上に並んだ子どもたち後列の下半身が重なり部分として描かれないという視覚的リアリズム期への特徴の萌芽が確認された。

M児の事例では3歳6か月から5歳1か月という期間のなかで象徴期から図式期への移行、図式期のなかに写実の黎明期の萌芽が認められた。同様にリュケG.H.（1927）による知的リアリズム期から視覚的リアリズムへの萌芽が確認されたといえるだろう。

	ステージ 1	ステージ 2	ステージ 3	ステージ 4	ステージ 5	ステージ 6	ステージ 7
描画時月齢	人物像がよくわからない	顔があり腕脚がない	顔があり腕脚がある	胴があるが腕脚どちらかが欠けている	胴があり腕脚がそろっている	腰のある体幹	首、腕、脚がありバランスがとれた人物像
3歳 6か月以前	○						
3歳7か月		○					
3歳10か月		○			○		
3歳11か月					○		
4歳0か月					○		
4歳3か月					○		
4歳6か月						○	
4歳11か月						○	○
5歳0か月						○	○
5歳1か月					○		

表2 M児人物画におけるボディイメージの発達 筆者作成

2. ボディイメージの発達

三浦ら（2005）は幼稚園女兒183人を対象に人物画を描かせて人物としての完成度かはボディイメージの発達を検討し、7つの発達段階を示した。それによると、3歳から5歳の間に大きく発達し、年長児クラスにおいて女性的な

特徴があらわれ、性差が明らかになるという。M児のケースによれば、ステージ3、ステージ4の段階が見いだされず、3歳11か月ころに一足飛びにステージ5の人物画に発達したことが見て取れる。同じころに図式期への移行も完了したと合わせると胴があり、腕脚のそろった人物像がM児の内的なシンボルとして完成したことを意味する可能性がある。

その後4歳の終わりころには上下半身をかき分けるなどかなり完成度の高い人物画を描けるようになったが5歳1か月時点で、視覚的リアリズムというべき、前後の2列の子どもたちを描く時に大人数のためか、下半身を描かない、簡略化した人物画を描くことによって人物画のボディイメージとしては退行するようになっていることが興味深い結果となった。東山ら（1999）によれば写実の黎明期には、部分的には写実的にかけるが全体的には矛盾が起きたりバランスが狂う、としており本事例での一致が明らかになった。

3. 空想の友達（イマジナリーフレンド）の登場

各写真中にある➡を参照すると、3歳10か月から4歳0か月にかけて、実在の友人の名前とは異なる、主に「メ」から始まる（メリーちゃん メーリンちゃん メロディーちゃん メリービー メリーコーラちゃん）空想の友達（イマジナリーフレンド）と、実在の見える友達が頻出する。視覚的には片流れの胴体やウサギのような頭部が観察される。他の実在の人物像と比較するとファンタジックな風貌ともいえる。

森口（2014）によると空想の友達には名前があり性格があり基本的な性格、視覚的な姿や声があり、一人っ子が持つことが多く、寂しい時に空想の友達と交流を持つことによって情動を補償しているという説が有力である。近年では『思い出のマーニー』というアニメ映画でも取り上げられた。対象となったM児は一人っ子であり、19才となった現在では記憶はないということだが、描画にあらわれた空想の友達は当時のテレビなどのキャラクターとも異なる。また現れた時期も3歳10か月から11か月と短期間であり、非常に興味深い存在である。

今後の課題

本稿では1人の幼児の描画の縦断的検討によって東山ら（1999）リュケ（1979）らの子どもの描画発達段階の移行を確認し象徴期から図式期、図式期から写実の黎明期へ個人内での変化が徐々に顕在化する経過を確認することができた。

近年では殴り書き期から象徴期の描画発達における養育者との相互作用の影響を含めて検討する研究や、認知発達の側面から子どもが見えたように描くようになる過程を空間認知力や技能、プランニング能力などの要因によって説明されてきている。また描画を社会的コミュニケーション文脈でとらえなおそうとする研究も始まっている。

子どもの描画意図が養育者とのやりとりから芽生え、描画意図に基づいて描画し、命名したり説明したりする場面の実証的検討を行うことは、子どもの描画行動の動機解明の手掛かりとなることだろう。また「可逆操作の高次化における階層一段階理論」「心の理論」の発達、「ボディイメージ」の発達など他の発達理論との関連についても検討の価値が大きいと考えられる。

参考文献

- 東山明 東山直美 子どもの絵は何を語るか 発達科学の視点から NHK
ボックス（1999）
- 山田真世 幼児期の描画発達研究の動向と展望 神戸大学大学院人間発達環境
学研究科紀要第8巻第1号（2014）
- 近藤綾 渡辺大介 中見仁美 幼児の描画表現に関する発達の研究—想像画と
観察画の比較— 幼年教育年報 第38巻 85-93（2016）
- 三浦由梨 渡邊加礼 渡邊タミ子 大山建司 幼児期女児の描いた人物がによ
るボディイメージ発達の研究 山梨県立大学看護学部研究ジャーナル
Vol.3 No2（2005）

森口佑介 おさなごころを科学する 新曜社 (2014)

リュケ, G. H. 須賀哲夫(監訳) 子どもの絵: 児童画研究の源流 金子書房(1979)

謝辞

本稿は筆者の長女の幼稚園時代の描画作品を対象としました。現在受験生として頑張る長女真子の姿に常に励まされてきた19年でした。心からの謝辞と激励を送ります。